

小泉信三著「平生の心がけ」講談社学術文庫 1988年11月10日刊を読む

## 1. 練習

- (1) 学ンデ時ニ之ヲ習フという習の字は、鳥が羽ばたいて飛翔を練習する形を現したものであると云うことである。私は人間の能力がこの練習ということによって高められ、不可能が可能にされて行くことに興味を感じている。人類進歩の道程上において、今日まで無数の不可能が可能にされて来たが、それは一方では発明によってなされ、他方では練習によってなされた。空を飛ぶこと、水を潜ることは、人類にあって以来の願いであったろうが、この宿題は、発明によって解決された。他方、無数の事例において、人間は練習練習によって、不可能を可能にして来たし、また現にしつつある。
- (2) 寺田寅彦の随筆に、米粒に千字文を書く人の話があったのを記憶する。それによると、始め米粒を指頭にのせて毎日ただ眺めている。すると、それがだんだん大きく見え、仕舞いには鳩の卵くらいに見えて来ると云う。その時に至って、特殊の細い筆で書けば千字書けるというのである。また、天体の観測者が、非常な速さをもって望遠鏡面を飛過する天体を目で捉らえるのは容易でないが、それが練習によって、やがてゆっくり見て、カードに記載することも出来るようになる、というような話であった。
- (3) 吾々はこれに類する練習の実例を到るところで見ると、手近のところでは、運動競技の名手の技術には、屢々驚かされる。先年招かれて学生の剣道道場に行くと、わざわざ模範仕合をさせて見せてくれた。選ばれたのは、三段中の精鋭二人ということであったが、撃ち合うこと数合、如何なる技か、一方の者は竹刀を捲き落された。瞬間、飛びすさった赤手の剣士は、竹刀を振りかぶった相手と相対した。かけ声とともに撃ち下す。どう引っ外したか、次ぎの瞬間、二人は竹刀を捨てて組み合っていた。三段中の手利きと云われた相手の太刀の下を、どうくぐったか、文字通り目にも留まらぬ早業であった。その時考えたが、仮りに吾々がどんな名刀を振り廻したところで、この赤手の若者を斬ることは出来ないのである。剣道では昔から、一眼、二早速、等と唱えて、目の練習をやかましく云ったものときくが、目前にその実演を見て驚いた。
- (4) しかしこれは剣道には限らない。吾々は見慣れて何とも思わないが、野球の打者が飛び来る速球を打つのも、実は驚くべきことである。いわんや咄嗟に曲るカアヴを、誤りなく打つ等に至っては、常人から見れば、人間以上の業とも云えるのである。試みに全く野球の心得のない人の前に、静かにゴロをころがして掴ませて見ると分かる。大抵の人は、両手で、球の通過した後の空気を掴むのが常である。もしこれが常人であるなら、打者の後にいて、振り廻したバットに触れたファウルチップを平気で掴む捕手の如きは、超人というべきであろう。
- (5) 柔道の心得のあるものは、倒れても頭を打たぬ。水泳の心得のあるものは、水に落ちれば、自然に適当に手足を動かして、沈まない。一体、立泳ぎの捲き足の如きは、一見不自然な足の動

かし方をするのであるが、練習したものは、何の苦もなく、無意識の中にそれをする。およそ水に落とせば必ず溺れて死ぬ人に比較すれば、落ちて沈まない人間は、別種の動物と称しても差支えないほど、優等の種族である訳だが、人は練習によってそれになることが出来る。

(6)今これを書いているところへ到着した週刊誌『タイム』を見ると、ロンドン・ウィンブルドンの大会に出場するテニス選手の写真が幾つも載っている。それを見ると、いずれも咄嗟の急場を写したもののみであるが、誰れも皆な申し合わせたように、正しく脚を開いている。一体、テニスコートの上で球を打つのに、教えなければ、人は誰れもネットと平行に両脚を開く傾きがある。しかし本当はネットに対し直角に近く開くのが合理的であると考えられる。即ち右方に来た球は、左肩をネットに向け、左方に来た球は右肩をネットに向けて打つのが本則とされている。それは初心者の姿勢とは違うという意味では、不自然であるが、練習を重ねる中、却ってそれが自然となり、造次にも顛沛にも、無意識の中に法式通りのフットワークを誤らなくなることは、右の写真にも示される通りである。そうして実際(力学上)この姿勢でなければ球を強く、正確に打つことは出来ないのである。

(7)ところが、練習によって如何なる境地に達し得るかということは、まだそこに達したことの無いものには分らない。そこで、技術の習得上達には、理屈なしにただ練習させるということが必要になって来る。弓術馬術の稽古に、矢数を射、鞍数を乗るということを喧しくいうが、技術技芸の上達には、どうしても理窟ぬきの鍛錬練磨ということが必要となり、教えるものと、教えられるものとの間に、或る師弟的の関係が自然に成り立つことになる。

## 2. 練習(続き)

(1)以上は主に練習による肉体的能力の増進についていったものであるが、一步を進めると、吾々の精神的能力の向上についても、随分同じ事が言われるのではないか。

(2)嘗ての日本の海軍では「定刻前五分」ということを喧しく教えたということで、海軍軍人は皆な時間の制限を守ることが厳格であった。これは軍艦の出港入港その他、戦闘の用意、実行上、一刻の遅滞をも許さぬところから、特に重視されたのであろうが、兎に角この訓練を受けた海軍軍人は、何事にも、時刻を守ることが、一般部外者に比して断然正確であった。この習性は、海軍軍人通有の長所として誇るべきものであった。そうしてこの長所は、疑いもなく訓練によつて養われたのである。

こういう事を学校の教師が、折りに触れて生徒に心づけてやることは無用であろうか。私はそう思わない。ここでもまた少しばかりの心がけと練習が、意外に大きい結果を生むであろう。運動でも技芸でも、多少とも稽古ということをした経験のあるものは、練習の効果に対して楽観的であろう。

### 3. 演説

- (1) 演説という言葉は、今は完全に土着のものとなったが、元とは英語のスピーチの翻訳で、訳者は福沢である。ひとり訳語を定めたばかりでなく、演説討論のしかたそのものを日本人に教えたのも、福沢であった。彼れはそれを、明治6年出版の『会議弁』によってした。後年福沢は福沢全集の緒言に、演説法弘布の由来を語って、こう書いている。
- (2) 「明治6年春夏の頃と覚ゆ、社友小泉信吉氏が英版原書の小冊子を携へて拙宅に來り、扨云ふやう、西洋諸國にて一切の人事にスピーチの必要なるは今更ら言ふに及ばず、彼國に斯くまで必要なる事が日本に不必要なる道理にある可らず、否な我國にも必要のみか此法なきが為めに、政治も学事も將た商工事業も、人が人に所思を通ずるの手段に乏しく、之が為めに双方誤解の不利は決して少なからず、今この冊子はスピーチの大概を記したるものなり。此新法を日本國中に知らせば如何との話に、余は其書を開き見るに成程日本には新奇なる書なり。然らば兎に角に其大意を翻訳せんとて、數日中に抄訳成りしものは即ち會議弁なり」
- (3) この社友小泉信吉なるものが、私の父である。この通り、父は演説法を日本に紹介する上に一役買った訳であるから、演説が上手であつても好い筈であるが、それが丸きり駄目で、嫌いであつたとは、私の母の話である。私は演説を嫌うことにおいて、父の子である。演説が嫌いだとか下手だとかいうことを、日本では、一種の自慢にする風があるから、ウツカリいえないが、私の場合事実である。私は自分で考えて見ると、物を書くのは元來好きな方で、時があれば、人に需められないでも何か書くだらうと思う。演説の方は、違ふ。需められないのに演説するということは全然考えられない。その癖、立つとよく長談義になる。また、言おうと思う通りでないことを言つてしまつたりする。要するに、年甲斐もなくアガルのであろう。それで先年來演説しなければならないと分つてゐるときは、予め自分でノオトを作つて行つて読むことにした。この方法では、當然自然性(spontaneity)が失われる。その代り間違いがない。言いたいことを、正確な言葉で言いたいだけのことをいうという利益はある。これをやり出してから演壇に立つのが安心になつた。勿論すべての場合にノオトを読むという訳には行かない。野球の応援団長が激励演説をやるのに、ノオトを用意して往つて読むとしたら、それは非常識であらう。けれども、私などが頼まれる演説は、多少とも思想的内容を持ったものであることが常である。思想的内容のあることをしゃべるには、予め考へて行かなければならぬ。考へたことを言うためには、當然考へたことを書き留めて來なければならぬ。書き留めて來たことを、態々暗記して、ノオトなしで語るのも悪くはないが、それくらいなら寧ろノオトに拠りつつ語る方が、より正確でもあり、より自然でもあらう。よく何時間とかの演説を、ノオトなしでやつたといつて、稱讚するけれども、それは考へたものである。もしそれが無準備で來て、演壇上で思いつくままをしゃべつたのであれば、そういう演説は思想的内容を伝えるには適しない。もしまた充分考へて來たことを、よく憶え込んで、諳んじてしゃべるといふなら、その暗記力は稱讚すべきであらうが、暗記は演説者の主力を注ぐべきことではない。寧ろノオトを読むことの確實にして簡潔なるには如かぬであらう。と、私は我田に水を引く。
- (4) 問題は、その読み方である。人に作つて貰つた草稿を、下読みもせず携へ、演壇上で始めてそれを披けて見て、傍目もふらず棒読みにするのは論外で、この種の「朗読」演説が褒めら

れないのは、これは当然である。自分の思想を自分の筆で紙に書き、その用語を推敲し、それを自分のものとして読むのは、所謂「朗読」演説とは違う。ただ問題はその読み方であってそこに相当の工夫を要すると思うが、西洋人はこの点、気を付けてよく練習しているように見える。ノートを程よき高さに持ち、それと聴衆とを交る交る見ながら、一々の言葉に自然の感情を托しつつ語るといふしかたには、学ぶべきものが多い。今後聴衆が愈々忙しくなるに連れ、冗漫と不正確とは愈々禁物となる筈であるから、演説は益々よく準備されたものにならなければならぬ。よく準備するということは、即ちやがてノートをよく整理するということになるであろう。

(5) また講釈師の話になるが、死んだ伊藤痴遊がよくいった。「博士と名のつく人と一緒に講演会に出るのは御免です。博士は時間の制限を守ったことがない。だから、私は博士と一緒にときは、いつも先きへやらして貰うことにきめています。私達は調べたことを、どうして刈り込もうかと苦労をするのに、博士たちは、調べたことは皆なしゃべろうとします。時間が延びるのは当たり前です」と。耳の痛い話であるが、これもノートの整理と推敲によく意を用いれば、避けられることである。

P176 ~ 179

#### [コメント]

「練習は不可能を可能にする」。時刻を守ることのできる能力も練習によって身につく。「武者語り」は「演説」に通じ、「演説」は「ノートの整理と推敲」が欠かせない。このようなことも含め、ジェントルマンとは何か、教養とは何かを考えると小泉先生の著作ほど参考になるものはない。いつも手元に置くべし。

- 2010年5月24日 林明夫記 -